第２学年　道徳学習指導案

１　主題「男らしさ、女らしさ」

【２－（４）互いの異性についての正しい理解を深め、相手の人格を尊重する】

資料「たまたま女に生まれただけ」

（出典　中学校道徳②　明日をひらく　福岡県版　東京書籍）

２　主題設定の理由

＜主題の価値＞

○　この時期の生徒は、異性を異性として意識するようになり、異性の前で自然に振る舞うことが難しくなることがある。また、このような見方には大きな個人差があり、この個人差によって友人との間に疎外感を感じてしまうことも少なくない。さらに、興味本意で、正確な吟味もないまま氾濫する性情報に触れて誤った知識や不正確な情報を獲得し、このことが問題行動として現れることもある。加えて、これまでの生活経験を通して、「男らしさ」「女らしさ」といった概念に触れてきており、現実の自分とこのような概念とのギャップに違和感を感じ始める生徒もいる。

　このような時期だからこそ、互いの身体的・生理的性差を正しく理解したり、人との違いが性差によるものなのか、個性によるものなのかを見極めたりする見方を身に付けたりすることは、潜在的な性差意識を解消し、人として支え合い、共に生きようとする資質の育成に資するものである。

＜主題にかかる生徒の実態＞

○　本学級には、明るく、行動的な生徒が多い。比較的思ったことを自由に言い合ったり、互いのことを認め合ったりするような雰囲気があり、各種の行事においても、学級一丸となって取り組むような姿が見られる。しかしながら、日常生活の中では、些細なことで男女間のもめ事が起こることがある。また、異性に対して興味が芽生えてきた生徒が、その思いを上手く表現できずに、わざと乱暴に振る舞ったり、或いは過剰に接点を求めて友達から冷やかされたりするような姿が見られる。このような行為の背景には、自分や異性の性差に対する認識が十分でないことに加えて、これまでに見聞きしてきた「男らしさ」や「女らしさ」といった概念に縛られて、固定的な見方しかできなくなっていることが考えられる。

＜指導にあたっての留意点＞

○　本資料は、「男らしさ」や「女らしさ」という概念に対して違和感を感じ始めた女子生徒の、一人称による読み物資料である。「わたし」がこれまでの経験を振り返るとともに、中学生になって初めて男子とのけんかに負け、自分が「女の子らしく」泣いてしまったことで、「男のくせに」女の子を泣かせた相手がよってたかって責められるという経験を通して、自分自身の異性に対する見方の矛盾に気づき、自分の見方を見つめ直そうとする内容である。書かれているエピソードは生徒たちにとって大変身近であり、共感しやすい内容になっている。また、「わたし」は自分自身の見方を素直に受け止めながら、時には自分自身を批判的に見たり、異性の立場を思いやったりするなど、自己内対話を繰り返しており、共感的に活用することによって、生徒が自分自身を見つめ直すのに適した資料である。

　指導にあたっては、導入段階においてイメージマップを活用し、「男子」「女子」という潜在的性差意識を明らかにして、このような見方が妥当なのか、という問題意識をかき立てる。展開前段及び後段においては、「わたし」の気持ちを窓口として、潜在的性差意識について考え合う活動を通して、自分自身の性差意識が顕在化するように発問を構成するとともに、話し合い活動に人数の段階をつける。終末段階においては、導入段階で使ったイメージマップを見直し、書き直す活動を位置づけることで、異性や性差に対する見方の変容を実感することができるようにする。最後に、それぞ

れの見方が、性差によるものか、個性によるものなのかを問いかけることで、日常生活においても自分自身の見方を見つめることができるようにする。

3　ねらい

○　資料を通して、性差への見方に対して主人公が感じている違和感に共感したり、性差に由来する理不尽な経験を話し合ったりする活動を通して、男らしさや女らしさといった明確な根拠のない先入観を持って異性を見ていた自分に気づくとともに、性差を正しく、温かく理解し、互いを尊重しようとする態度を育てる。

4　展開

	主な学習活動と発問	指導上の留意点
導入	1　「男子」「女子」について、互いの見方を話し合う。 ・　もめ事があって女子が泣くと必ず男子が悪くなってしまうのはおかしいのではないか。 ・　面倒くさいことは全部女子に押しつけて、男子はずるいと思う。	○　互いの見方の根拠が、「個人」でなく「性別」であったり、その見方が必ずしも望ましいものではなかったりする事に気づき、理不尽さを感じることができるように、事前に男子には女子の、女子には男子のイメージマップを書かせておき、見方の顕著なものを提示する。
展開前段	2　資料「たまたま女に生まれただけ」を読んで、「わたし」の気持を話し合う。 (1)「世間は男の人中心だ。」という母を問い詰める「わたし」の気持を話し合う。 ・　いろんな世界で女性が活躍してるって聞くし、政治家などを見ても、性別関係なく活躍している人はたくさんいる。 ・　不都合なことがあると全部男が悪くなったり、大変な目にあったりする。女性で活躍している人もたくさんいるし、男中心な世の中とは言えないんじゃないか。	○　本資料は、女子生徒の視点で書かれている。そこで、「わたし」に共感しやすいと思われる女子生徒の発言を受けて男子生徒が発言できるように、或いはその逆になるように意図的に指名することで、男女がともに「わたし」の気持に共感できるようにする。 ○　生徒の経験や考えの根拠が、必ずしも合理的ではないことに気づくことができるようにするために、「わたし」の考えに強く共感している発言と、母親の言うこともあながち否定できない、という発言を対比的に板書し、文中の「みんながそう言っている。」という一文と関係づける。
展開後段	(2)「男のくせに」と考えていた自分を振り返っている「わたし」の気持を話し合う。 ・　男のくせにって言われるとすごく情けない人間のような気になってしまう。 ・　「わたし」も、母親に女であることを押しつけられていらだっていたはずなのに、自分自身が「男のくせに」という見方をしている。その矛盾に気がついているんだと思う。 (3) なぜ、「わたし」が「たまたま」についてもっと真剣に考えよう、と思ったのかを話し合う。 ・　たまたま、だけど、それを受け入れ	○　「わたし」の気持に強く共感しながら、一人一人が自分自身の経験や見方を振り返ったり、そのことを共有化したりできるように、全体での話し合いの前に小グループでの話し合い活動を位置づける。 ○　「わたし」の気持を考えることを通して、自分や友だちの経験から、「○のくせに～」という見方の理不尽さに気づくことができるように、全体での話し合いをコーディネートする。 ○　「たまたま」が偶然を表す言葉であることをおさえた上で、今の自分が男子、或いは女子であることをどう受け止めるのか、ということに迫る発問を加えるこ

	てー生懸命生きることが、自分を大切にすることにつながるって気づいたんじゃないかな。	とで、自他の性差を受け入れ、尊重しようと思い始めている「わたし」の気持に迫ることができるようにする。
終 末	3　自分自身の性別や異性に対する見方を見つめ直す。	○　学習を通して、自分の異性に対する見方の変容を実感することができるように、自分の書いたイメージマップを見直し、「よさ」の視点で書き直す活動を位置づける。 ○　互いのよさを出し合い、それが性差に起因することか、その人特有のよさなのかを考え合うことで、生徒の心に問題意識を残す。

5　指導の実際

（１）事前の活動　～イメージマップの作成～

事前に、男子生徒については「女子」、女子生徒については「男子」をキーワードとして、Ａ４の紙にイメージマップを作成する活動を行った。これは、生徒一人一人の、異性に対する見方を把握するとともに、生徒が、自分の漠然とした見方の自覚や、その見方のもととなった体験・経験の想起を促すための手だてである。

作成する際に、目的がわからないまま作成すると素直な表現が滞る可能性があるため、ため、合唱コンクールの自由曲の選定にあたって、個人の考えの違いではなく、結果として男子と女子の対立、ということがあったことを事例にあげて、以下のような視点で問題提起を行った。

①　個人の意見の違いが、男子対女子のような対立に発展したのはなぜか。

②　なぜ、男子は、女子は、というような性別でグルーピングしてしまいがちなのか。

生徒達は、一様に何か言いたそうな表情を浮かべてはいたが、この時点では発言を促すことはせず、お互い、異性のことをどう見ているかをイメージマップに表すように指示した。

（２）導入段階の手だてと生徒の姿

本時の導入段階においては、前述のイメージマップの中から、特に「男のくせに」「女のくせに」というようなニュアンスが色濃く出ているもの、多数の生徒があげているイメージが多く表されているもの、異性として意識していることがあらあれているものを選んで、その一部を拡大して匿名で提示した。生徒たちは、同性のマップに同意を表しし、異性のマップに対しては異議を唱える者が多かった。そこで、「（男子は）整理が下手」「（女子は）すぐ泣く」という記述を例に挙げ、整理が上手な男子や絶対に泣かない女子はいないのか、そのような男子や女子は、「らしくない」ということなのか、と問いかけた。加えて、そのような見方をしたくなる気持はわからなくもないが、このままでいいのか、と問いかけた。イメージマップをこのように活用した結果、生徒は自分たちの異性に対する見方に問題意識を持ち、「男らしさ、女らしさってなんだろう。」という学習の方向付けを行うことができた。

（３）展開前段・後段の手だてと生徒の姿

資料を読んで概要を把握したのち、

①　「世間は男の人中心だ」と主張する母親に詰め寄る「わたし」の気持ち

②　「女の子だから」と言われることに憤っていながら「男のくせに」と見てしまっていた自分の矛盾に気づいた「わたし」の気持ち

③　喧嘩に負けてしまったことをきっかけとして性差に対する自分の考え方を見つめ直そうとする「わたし」の気持を考えるという発問構成を通して、生徒が自分自身

の性差や異性に対する見方を見つめ直すことができるようにした。それぞれの段階において、以下のような生徒の反応を得た。

① 自分もお母さんも、決して男の人に負けてなんかいないのに、なぜ、男の人が中心で女は２番目というような言い方をするのだろう。しかもその理由は全然納得がいかない。
② 女のくせに喧嘩が強い、とか、男のくせに泣いた、とか、男や女がみんなもれなくそんな決まりにはあてはまらないのに、そういう見方をされるのはすごく腹が立つ。
③ 「たまたま女に生まれてきた」って、本当は男の方がよかったって思ってるように見えるけど、たぶんそうじゃないと思う。たまたま男、たまたま女、っていうだけで、男だから、女だからどうしなきゃいけないなんてないんだと思う。

特に②や③の反応については、「わたし」の気持を越えて、自分自身の考えを述べていると考える。資料の特性が生徒の見方に響き、自分の事として考える姿を引き出すことができた。

（４）終末段階の手だてと生徒の姿

終末段階においては、何気なく見ていた、恥ずかしい、等の理由から素直に認められなかった異性のよさを、再度イメージマップに書き表す活動を位置づけた。「頼れる」「やさしい」など抽象的なイメージの記述に対して、その理由を問いかけると、具体的な個人名こそあがらなかったものの、ともに生活してる中で触れた友だちのよさが具体的に出てきた。そこで、そのよさは、その人が男子だから、或いは女子だから持っていたのか、それとも、その友だち自身のよさで、男女は理由にならないのか、と問いかけ、授業を終えた。授業後の感想には、以下のようなものがあった。

□ 本当はけんかなんかしたくないんだけど、どうしても、女子同士で味方をしてしまう。トラブルになったとき、男子の方が正しいように思えても、恥ずかしくて一人だけ男子の味方なんてできなかった。でも、男子だからけんかするなんて本当はおかしい。男子だから、女子だからとかじゃなくて、一人の人としてお互いが見られるようになったらいいなと思った。
□ ぼくはあまり力も強くないし、運動も苦手です。それが男らしくないようで恥ずかしかったです。でも今日の学習をして、自分も女子に対して「やさしくておとなしいほうがいい。」っていう見方をしていることがわかりました。
□ 「わたし」はキャラクター的に女の子らしくって言われるとすごく悔しかっただろうなって思います。私もそうです。でも「わたし」は、いろんな場面で自分を振り返っていてすごい冷静だなと思いました。私も、ついかっとなってしまうけど、冷静に考えたら、男子のいいところがいっぱい見つかりました。少し、男子の見方とか自分の見方が変わったような気がします。

上記の感想に見られるように、自分自身の見方を見つめ直したり、異性に対する見方を考え直したりしていることが伺える。また、性差を越えて「人のよさ」にも言及しており、本時の主たるねらいである、「性差を正しく、温かく理解し、互いを尊重しようとする態度の育成」につながったものと考える。

６ 課題

○ 本主題では、身体的・生理的性差にまでは言及できなかった。他教科・他領域の学習と関連づけて身体的・生理的性差に対する正しい理解と、この理解を下支えする温かい心情をバランスよく育成する必要がある。